



イオン心をつなぐプロジェクト

Project Aeon Joining Heart

＜ 2012年～2021年 ＞
プロジェクトの記録

はじめに

東日本大震災で犠牲となられた多くの方々と、今なお平穏な日常を見出せず苦境にある方々に心よりお見舞い申し上げます。

そして10年間、よそ者である私たちを地域で迎え共に活動していただきました被災地域の皆さまに心よりお礼申し上げます。

この文書は心をつなぐプロジェクトの10年の活動を振り返り、プロジェクト全体の評価・検証を目的として記しました。したがって其々の活動内容については、これまでにまとめた活動報告書をご参照願います。

これまでの活動報告書



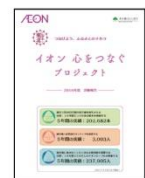
2019 年度 「活動報告書」



2018 年度 「活動報告書」



2017 年度 「活動報告書」



2016 年度 「活動報告書」



2012～2014 年度 「活動報告書」

< 目 次 >

I、活動実績

II、初動

- 1、東日本大震災の概要と課題
- 2、災害とイオンの基本理念
- 3、プロジェクトの発足に向けて
- 4、イオンの行う東北支援の全体像
- 5、活動の三本柱
- 6、パートナーとの協働
- 7、中長期計画の策定

III、プロジェクトの体制

- 1、組織体制
- 2、推進責任の設置と責任者研修
- 3、活動補助金制度
- 4、活動記録と進捗管理

IV、各種活動

- 1、震災の伝承活動
- 2、植樹活動
- 3、ボランティア活動
- 4、未来共創プログラム
- 5、各社・各単組の活動状況報告

V、プロジェクトの評価と検証

- 1、数値目標の達成
- 2、中長期計画との整合性
- 3、コンセプト・活動目標との乖離

VI、活動を通して学んだこと

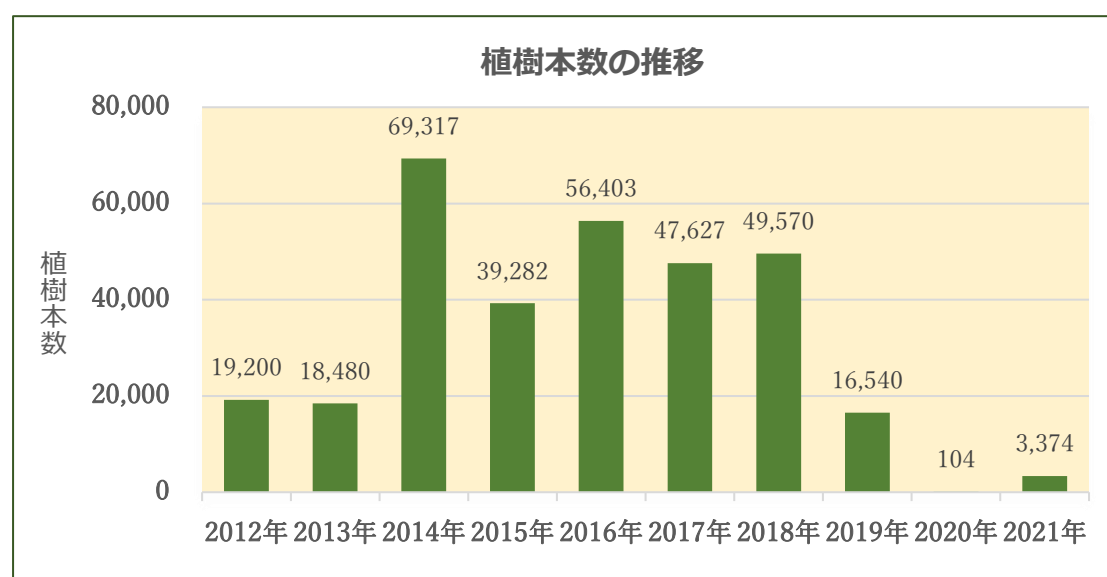
- 1、地域社会と社会課題
- 2、自然災害と環境保全

VII、資料（活動年表）

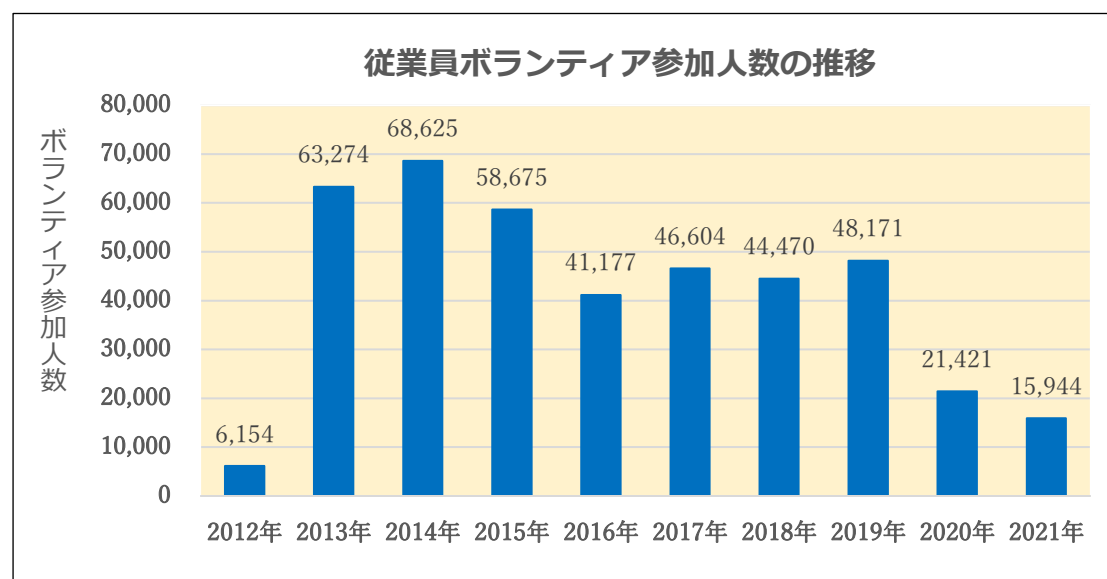
I、活動実績

(2012 年度～2021 年度)

累計植樹本数 319,897本



累計参加人数 414,515人



Ⅱ、初 動

1、東日本大震災

<概要>

「東北地方太平洋沖地震」による巨大災害
2011年3月11日（金）14:46分発生。

マグニチュード9.0、最大震度：7

巨大地震の後に津波が襲来し東北の太平洋側を中心に未曾有の災害となる。

津波により福島第一原子力発電所が事故を起こし放射性物質が大量に大気中に放出される。東日本大震災が「津波と原発」の世界でも類を見ない「複合災害」と呼ばれる。

・被害規模（2022年2月データ）

死者数：19,747人（災害関連死含）

行方不明者：2,555人

住居被害：122,005件

福島からの避難者数：およそ3万9千人
（災害直後の避難者数は47万人）

・イオンピープルの被災状況

この巨大地震と津波でイオン気仙沼店、多賀城店、ザ・ビッグ塩釜店、サンデー大船渡店は直接津波の被害を受け浸水しました。地震による被害も大きく、多くの店舗が被災し店内での営業が困難になりました。

【津波が襲来したイオン気仙沼店】



イオンピープルも大津波により10名を

超える仲間が犠牲になりました。数十名の仲間は大切な家族を亡くし、家を津波に流された方も少なくありませんでした。原発事故で、戻るべき故郷を無くした方もいました。私たちもまた、多くのお客さまと同じように被災者となり、同時にライフラインとしての店舗を守り、商品を届けることで、戦場のような状況の地域に「日常」を届けようと思いました。

【浪江町の警戒区域、21年7月撮影】



<東日本大震災の課題>

震災から11年が経過しましたが、課題は大きく2つ残っていると考えます。

一つは三陸沿岸部の急激な人口減と、それに伴う地域コミュニティの維持が危機的な状況にあることです。同様に一次産業の担い手不足が主要産業である農業、漁業の存続を困難な状況にしています。第一次産業従事者が人口の1.4%しかいない日本では、震災による一次産業への打撃は致命傷になりかねない一大事だということです。

もう一つは福島原発事故の収束と廃炉への対応です。原発そのものの廃炉に向けた取組はもちろん、広大な土地の復興計画は進んでいません。ふるさとを追われた人たちの多くは無力感を抱きながら折り合いのつかない思いとともに、今も本来予定していない場所で暮らし続けています。

2、発災直後の行動とイオンの基本理念

震災発生時におけるイオンビールの行動については、後に聞き取りによる「震災の手記」にも取り上げましたが、それぞれの現場でお客さまと従業員の命を最優先した対応がなされていました。その後、安全が確認できた店舗では、当日余震の続く中で「店頭販売」を行い地域のお客さまの「店を開けて欲しい」という声に応えました。



2、プロジェクトの発足へ向けて

①、オールイオンで東北を支援する

被災地域においてもイオンの基本理念を体現化するため、国難ともいえる未曾有の災害の中で私たちの果たすべき役割の一つとして、労使が協働しイオンビールの個人が主体として活動できる場をつくるのが提起されました。当時30万人だったグループの従業員全員が何らかの方法で関わられるような「活動のすそ野を広げ、到達点を高める」というイメージでプロジェクトの土台が作られました。

②、プロジェクトのコンセプトを定める

オールイオンでの取り組みは、イオンビールの基本理念を体現化することで、イオンに求められる社会的責任を果たしていこうとするものであり、初期的動機としてコンセプトの一義的な理由付けがなされま

した。

コンセプトのもう一つは、プロジェクトがもたらす機会や場面において、イオンビールの個人が自律的、創発的に課題に取り組む過程を通して、人間として、ビジネスパーソンとしての成長を実現するというねらいです。

<基本コンセプト>

イオンの基本理念である「人間」「平和」「地域」に基づき、全国のイオンビールの個人が、イオンの経営活動で得た多様な資源を活かして、創造性を発揮し、創発的な取組として、東日本大震災の復興に貢献する。

イオンビールの個人にとって、この体験はイオンの理念を体感する機会であるとともに、人間としての成長の機会となる。翻ってそれは、商人（ビジネスパーソン）としての成長でもある。

3、イオンの行う東北支援の全体像

一方イオン全体では「3.11復興への願いをカタチに」をスローガンに定め、被災地での仮設店舗を設け、移動販売を行いお客さまへ商品をお届けしました。

【3.11復興への願いをカタチに 2023、3月】



「夢のある未来」へ
私たちにできることを、一つひとつ。

地域の皆さまと手をたずさえ、ともに歩んできたイオン。

「復興への願いをカタチに」の決意のもと、地域のライフラインとして、

日々の暮らしに寄り添い、さまざまな活動に取り組んでまいりました。

地域の豊かな産品を全国の店舗を通じてお客さまにお届けする、被災地の経済活性化に向けた取り組み。

東北近海で獲れた魚を使った商品開発による、地域産業の復興に向けた取り組み。

仮設店舗や移動販売車による訪問販売で、毎日の不便を少しでも解消していただくための取り組み。

こうした日々の活動が、やがて「夢のある未来」につながることを信じて

イオンは地域の皆さまとともに、これからも歩み続けてまいります。

また「がんばろう！東北！」のキャッチフレーズで産業全体に深刻な影響を受けた水産業を応援し「東北フェア」を通して東北の現状をお客さまにも訴求しました。

店舗の出店により地元のにぎわいと雇用を提供するとして、2014年にはイオンタウン釜石・スーパーセンター陸前高田店がオープンし、2016年にイオン広野店、2018年にはイオンモールいわき小名浜、2019年にはイオン浪江店をオープンさせました。」

【イオンタウン釜石：サンタが100人やってきた】



2016年からはスローガンを「にぎわい東北～つばげよう、ふるさとのチカラ～」へ変え復興創生支援に向け全体像を示しました。



にぎわい東北
～つなげよう、ふるさとのチカラ～

AEON

《 東北の創生に向けた4つの方針 》

- 1、事業を通じた地域産業の活性化
- 2、雇用の創出と働きやすい環境づくり
- 3、地域の未来を“ともにつくる”社会貢献活動
- 4、安全・安心にらせるまちづくり

4、活動の三本柱

プロジェクトの具体的な活動内容については、基本理念に基づき「イオンらしさ」を大事にした活動を展開しようと考え、以下を活動の三本柱に定めました。

- ① 植樹活動（10年間で30万本）
- ② 現地に従業員ボランティアを派遣する。
- ③ 現地に行けない従業員も何らかの支援活動に参加する。（10年間で30万人）

活動期間に設定した10年間は、この災害の復興に要する長い時間を表したものです。30万人の参加については、当時のグループ内の従業員数30万人が、全員参加することを目指して設定しました。

5、パートナーとの協働

プロジェクトの発足に当たっては、イオンに大規模な災害支援についての実績が無いことから、適切なパートナーと連携し教を請い、活動を共にしていただくことが求められました。東日本大震災後は様々な支援機関や団体が立ち上げりましたが、地元根差した支援団体としてNPO「遠野まごころネット」さまとの連携に向けて調整を行うことになりました。

連携と協働については、遠野まごころネットの支援方針と、イオンの考える活動内容の摺合せから始め、まずはボランティア活動で遠野まごころネットが考える「郷づくり」から連携させていただいた。

その後、未来共創プログラムに発展する遠野市米通地区での「郷づくり」を通じて目指すべき地域コミュニティのあり方を学ばせていただきました。

2013年、私たちはプロジェクトのコンセプトを実現するため、遠野まごころネットさまと復興支援の目的を共有し、復興すべ

きコミュニティの姿を明示しました。

遠野まごころネットの復興支援の目的、

「人と人がつながりを持ち、人と自然、自然と産業が共存する持続可能な社会(地域共同体)の復興をサポートする」

その理由は、まごころネットが定めた復興支援の目的が、すべての地域に共通する普遍的な地域共同体の目指すべき姿であり、イオンの人間と地域そして自然に対する考えと重なるものであり、同じ目的で復興支援を進めることが成果につながると考えたからでした。

6、中長期計画の策定

活動期間 10 年を遂行するために必要なことは、10 年間の復興状況の予測とその時期に即した支援活動のイメージを仮説立てすることです。またプロジェクト全体のコントロールについても同様にイメージし体系づけておくことが大切でした。

【中長期の活動計画イメージ】



<中長期計画の概要>

まずプロジェクトの活動状態をイメージし活動を拡大していく時期、それぞれが自立し主体的に活動する段階、それぞれの活

動が一定の成果を収め定着していく時期と想定し以下のように規定しました。

① 第1期：2012 年～2014 年

「初期的構築期」

プロジェクト事務局が中心となり、支援活動を全国に広げる。

② 第2期：2015 年～2017 年

「自立拡大期」

グループ各社と労働組合が自立的に創造性を発揮して支援活動始める。

③ 第3期：2018 年～2021 年

「整理・充実期」

支援活動を通じて学んだ知見・経験を各々の組織に蓄積し新たな災害対策や社会問題の解決に活かしていく。

次に大まかに具体的な活動について、地域のニーズと全体のペース配分を想定し、表に落とししました。例えば 2021 年の段階で、すでに災害復旧のボランティア活動については福島県を除き終盤に入っていました。今後地方創生に関するボランティアの機会は逆に増加するものと仮定し 2018 年までボランティア活動を設定しました。結果的には 2016 年から始めた「援農ボランティア活動」は好評でコロナ禍で派遣を中止するまで続くことになりました。

植樹活動については、第2期に一気に植樹候補地が拡大し、植樹本数も増加し 2019 年に 30 万本の植樹が達成することになりました。

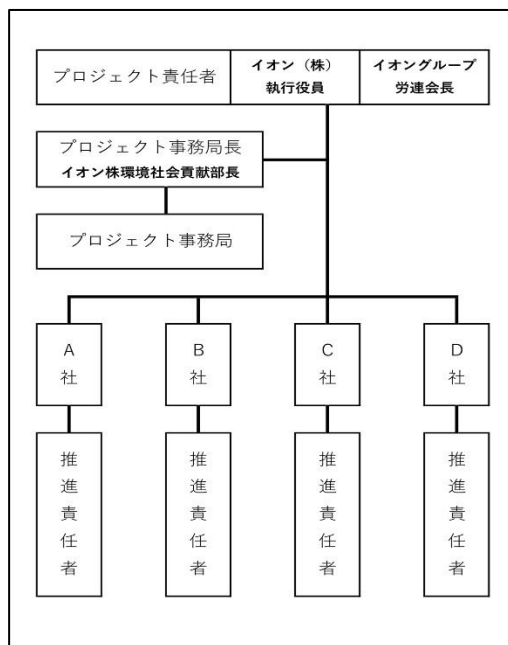
ボランティア活動を継承する形で想定していた「各社独自の活動」は「未来共創プログラム」として 2017 年～2019 年に活動のピークを迎えました。

Ⅲ、プロジェクトの体制

1、組織体制

発足時においては、プロジェクトの責任者としてイオン(株)森副社長、グループ労連の新妻会長のもと、事務局長を仙台駐在に置いた組織とした。その後、事務局長はイオン(株)環境社会貢献部長が兼務する形とし現在に至っています。

【図2：心をつなぐプロジェクト組織図】



2、事務局体制

プロジェクトのハブとなる事務局体制については、イオン株の環境社会貢献部とイオン労連本部にそれぞれ1名担当を置き、仙台事務所に駐在事務局を配置しました。仙台事務局はイオンリテール東北カンパニー1名と組合専従者1名が専任となり、同時にNPO 遠野まごころネットから2名のメンバー派遣を受け、4名体制でスタートしました。

3、推進責任者と推進責任者研修

まず活動を周知し定着させるため、各社・各単組にプロジェクト推進責任者を設けました。人選は其々に一任しましたが、各社の社会貢献担当者が兼務するケースが多く見られました。

指名された推進責任者に被災地の現状を知ってもらい、各社の取組に反映させることを目的に、2013年から「推進責任者研修」を実施しました。初回は岩手県の陸前高田市、大槌町で遠野まごころネットさまの協力をいただき開催しました。

ここでは東日本大震災後の遠野まごころネット支援活動と被災地の現状と課題について現場を訪ねお話を伺いました。特に大槌町では被災した吉祥寺の高橋住職から、避難所となった寺でのこと、僧侶として感じた「生きた証を残し、命の尊さを伝えたい」という思いをお聞きしました。

【写真4：吉祥寺高橋住職】



福島県コースでは、浪江町から避難した商工会の皆さまが設立した「NPO 新町なみえ」の皆さまから、警戒区域の浪江町を案内いただき当時のお話を伺いました。代表の原田さまから、「私たちは、ふるさとについての現実をどのように受け止め、どのように再生していけばいいのか」という大きな

課題を投げかけられました。

【浪江町請戸小学校 2013 年当時】



推進責任者研修は、2年間で10回開催し、2015年から始まる「未来共創プログラム」へとつながっていきました。推進責任者研修でご縁の出来た光洋では、原発事故を受けて日本全国に避難した浪江町の町民のうち、京都府行われた浪江避難者集会を手伝い、原田さまたちと一緒に避難した皆さまのお話を聞きました。その後現在まで新町なみえの皆さまとの交流が続いています。

4、活動補助金制度

各社の活動を円滑に進めるため、2015年から「活動補助金」の制度を追加しました。補助金は期首のエントリー制とし、新しく始めた「未来共創プログラム」の為の費用を1回あたり上限20万円、グループ各社の独自の支援活動に上限15万円と定め、不足分は各社が負担する取り決めでスタートしました。当初運用に関しては「未来共創プログラム」と「各社の活動」の区分が明確でなく戸惑う面もありましたが、補助金制度は概ね各社の活動を活性化するのに大変有効でありました。

5、記録と進捗管理

故「村上教行」東北代表から活動に当たっては、画像や数字データが大切になる旨の指導を受け、いつ、どこで、誰が、何をした

のかを画像とともに分かりやすく記録する方法として、プロジェクトのホームページを作成し投稿しました。しかし2015年から、より反映の早いFacebookに移行し、各種活動について発信するようになりました。

植樹活動については、実施日、植樹場所、主催の有無、イオンビールの参加人数、植樹本数、樹種などを記録し、合わせて植樹勝荘の理由についても記しました。

各社活動の数値データについては、活動ごとに計画書と報告書を提出していただき、各社ごとの活動内容、参加人数、費用について進捗管理をしました。また毎月報告を受け事務局で取りまとめた後、再び各社にフィードバックし、横並びでの対比を促すこととしました。

【イオン（株）ホームページ内でPT紹介】

「イオン心をつなぐプロジェクト」が進める3つの活動



1.東北復興ふるさとの森づくり

津波で被害を受けた海岸林の再生をはじめ、住民の心の拠り所としての神社、コミュニティ広場などに植樹をしています。また産業創生を目的としたぶどう・ユズ等の植樹も進めています。



2.被災地に従業員ボランティアを派遣

被災地のガレキの撤去から家の片づけ作業に始まり、現在では農業再生のお手伝い等、地域の皆さまに寄り添い、交流を通して、活動を進めています。



3.全国のイオンビールの東北を応援

「被災地を応援したい」という従業員の想いから、各社が様々な活動を展開しています。また、地域課題の解決を支援する「未来共創プログラム」も進めています。

IV、各種活動報告

1、震災の伝承活動

ドキュメンタリー映画「うたごころ」は、宮城県気仙沼市と南三陸町を舞台に、震災に巻き込まれながら、自宅を津波に流されながらも、部活動と受験と残り少ない高校生活をしっかり前を向いて生きていく少女の姿を描いた作品で、家族や友達に支えられながら自分の言葉で「ふるさと」についての思いを語っています。2012年に映画監督の榛葉健さと出会い、イオンタワーでの上映会を経て、2013年から全国16か所と中国の北京・広東で上映しました。上映会を通じて広く震災の現状を知り、被災した人たちと思いを共にしていただくことを目的に、プロジェクトの初期の活動として取り組みました。

【うたごころ上映会、気仙沼市民会館】



全国各地で被災地の語り部の話を聞く機会を設けていただきました。イオン九州では遠野まごころネットの臼澤良一さまが、自ら津波に飲まれ九死に一生をえた体験をお話されました。ダイエー労働組合ではイオン気仙沼店元副店長の斎藤光代さまを招いて、震災当日の気仙沼店の様子から営業再開までの苦労を話していただきました。

陸前高田市でボランティア活動の後にお話を聞かせていただいた釘子さまにもイオンタワーにお越しいただき、震災時自ら避難所運営のリーダーをされた経験をお話いただきました。

【陸前高田市内で語り部釘子さんの話を聞く】



2、植樹活動

東日本大震災による大津波は、青森県から千葉県の沿岸部を襲い、およそ800万本の海岸林をなぎ倒し流失させました。特に仙台平野から福島県にかけては先人が築いた松林が姿を消しました。また平野部の少ない三陸沿岸については津波の逃げ場がなく、川を遡った津波が内陸部まで深刻な爪痕を残しました。

2012年3月11日、30万本を目指した緑の再生活動は、宮城県のイオンタウン塩釜から始まりました。塩釜港に面したイオンタウン塩釜は、2mを超す津波に襲われ、店舗にも津波が流れ込みました。同じく宮城県内で津波被害を受けた、イオン気仙沼店、イオン多賀城店とともに営業再開まで長い時間を要することとなりました。震災から1年後の生活基盤の復旧もままならない中で、30万本植樹のスタートは、遠い未来の話をしているようで気が重くなる思いもありました。

【イオンタウン塩釜での 30 万本植樹スタート】



当初から意図したわけではありませんでしたが、心をつなぐプロジェクトが実施した植樹は、大きく4つに分類することができます。1つは宮城県・福島県を中心とした海岸林再生植樹です。これは国や県をはじめ多くの民間団体の協力なしには出来ない規模であり、プロジェクトでも林野庁や宮城県と協定を結び2014年、名取市の海岸林植樹から活動を開始しました。あまり良く知られてはいませんが海岸林の役割には、海からの潮風を防ぎ塩害や砂の害を緩和させる働きや高潮などから人里を守る働きがあります。また地元の方の話を聞くと松林で薪を集めたり、松葉をたい肥にしたりと、人々の暮らしと松林が密接に結びついていたようです。

【石巻市南浜での海岸林植樹】



2つ目は津波で流失した神社の鎮守の森を再生するための植樹です。余談ですが869年(奈良時代の頃)今回の地震と同じ規模の「貞観地震」が発生しました。3月11

日の「東北地方太平洋沖地震」が1000年に一度と言われる所以です。実は万葉集に貞観地震を読み込んだ歌があり、「末の松山、波こさじとは」の末の松山は多賀城市に現存しています。東日本大震災を機にこのような古い文献や古社に伝わる言い伝えがクローズアップされました。仙台市にある「波分神社」も有名です。また貞観地震以前から祭られている古い神社には津波被害が少ないなどの調査報告もありました。

鎮守の森再生への植樹はそうした過去の歴史の継承と、神社は地域住民の心の拠り所としての場所であることから、地域コミュニティ再生を目的に行いました。また神社への植樹を通じて、私たちの故郷の歴史や祖先のルーツについても大変興味深い話を聞くことができました。永く定住生活を送っていたかのように思いがちな先人たちも、気候や政情の影響で大胆な移動をしていたことなど、地域を知る上で大きな気づきとなりました。

【東松島市、白髭神社植樹】



3つ目は、にぎわいや景観を再生するための植樹です。岩手県の久慈市から大船渡市まで163kmを結ぶ第3セクターの「三陸鉄道」は朝ドラの「あまちゃん」で一躍有名になりましたが、道路状況の悪かったリアス式海岸の村や町で暮らす住民の足として

欠かせない交通手段でした。イオンでは震災前からのご縁もあり、津波で流失した駅前や周辺に植樹させていただくことになりました。北から「十府ヶ浦海岸駅」「陸中山田駅」「大槌駅」「島越駅」「甫嶺駅」「陸前赤崎駅」の6駅とその周辺に植樹しました。樹種は地元の皆さんと相談し、管理しやすくなじみ深い樹を選びました。特に思い出深いのは大船渡市の「甫嶺駅」です。地元の老人クラブの皆さんと全国のイオンのボランティアで和気あいあいとした雰囲気の中で植樹させていただきました震災前には立派な桜の木があったそうですが、桜の木は根が深いため列車の運行に影響するため諦め、ハナミズキとツツジを中心に植えたのですが地元の皆さまが大切にしている様子が訪れる度によく伺えます。

【三陸鉄道：甫嶺（ほれい）駅植樹】



また昨年の朝ドラ「おかえりモネ」の舞台となった気仙沼市の大島では、島の景勝地の亀山が大震災の火災で焼失し、更に松枯れも重なり厳しい状況になっていました。三陸沿岸は国立公園でもあり植えられる樹種に制限はありましたが、殺風景になった頂上付近に「ヤマツツジ」を植えることになりました。植樹本数は20,000本、交通の便も悪いことから毎年5,000本、4年計画で行うことになりました。この植樹は気仙沼

市と大島観光協会のご協力をいただき、地元で民宿や食堂を営む方も参加され、4年たつ頃にはすっかり顔なじみとなりました。

【気仙沼大島、亀山植樹】



4つめの植樹は、地元の産業や生業づくりに貢献できるような「果樹」の植樹です。始まりは連携した遠野まごころネットさまとの話し合いの中で、30万本の植樹に果樹は当てはまらないかという質問からでした。「ぶどうの木を植えてワインを醸造し、新しい生業をつくろう」という夢のある提案を受け、2014年5月、釜石市の天洞地区（旧釜石鉱山の映画館跡地）に550本のぶどうの木を植えました。

【釜石市天洞地区ぶどう植樹】



さらに2017年、2018年には遠野市の寒風地区にも苗木を植え、遠野まごころネットでは釜石市、遠野市の2個所の産地を持つワイナリーが誕生しました。

当時の遠野まごころネットの代表だった多田一彦さまは。「被災地には夢や希望が必要だ、私たちが夢や希望をたくさん作っていかう」と話されました。それから5年後の2019年に開催されたラグビーワールドカップ日本大会の開催に合わせ釜石産のワインをお披露目することができました。

【釜石ワインワールドカップラベル発売】



2、ボランティア活動

2011年震災発災当初から多くの企業や団体が被災地で、各地のボランティアセンターを通じボランティア活動を行っていました。イオンでも労使がそれぞれに参加者を募り別々の場所で災害復旧のボランティア活動を展開していました。

2012年、心をつなぐプロジェクトの発足に合わせてボランティア活動も統合し、陸前高田市の上長部地区で、遠野まごころネットさまの考える「郷づくり」のためのボランティア活動に参加することにしました。

「郷づくり」に参加した理由は、単発的なボランティアではなく、継続して同じ地域を訪れ、地域との関係性を深めることができると考えてのことでした。

ボランティア参加者は、全てのイオンビープルを対象に募集し、グッドライフクラブへ参加費の一部補助をお願いし、参加者

の負担を軽減するよう計画しました。

上長部は陸前高田市中心部の南側にあり、山に囲まれた集落ですが、津波が遡上し家や田畑が流され7名の犠牲者がでました。

ボランティア活動はまず地域の畑を再生することから始めました。山へ入り落ち葉を集め腐葉土をつくりました。

【たい肥を畑にまき農地を再生する作業】



並行して畑に入った瓦礫や石を拾い集めて畑を耕し菜種をまきました。こうして少しずつ表土が流れてしまった耕作地の土づくりから始めました。

【一列に並んで菜の花の種をまき土壌改良する】



次に津波に浸かって立ち枯れした杉の木を再利用するため、皮をはぐ作業です。この地域では、元々気仙杉というブランドの杉を生産していたことに加え、気仙大工という高い伝統技術も残っていて、地元の男性たちの手で、集落には仮設の製材所が建て

られ丸太を板に加工することができました。一年後には枯れた杉が除かれ、畑も少しずつ作物が栽培されるようになりました。

【津波で枯れた杉の皮を剥ぐ】



またこの時期陸前高田市のすべての小中学校は校庭に仮設住宅が建設されており、子どもたちが体を動かせる場所がありませんでした。そこで上長部の一角にサッカーグラウンドを作ることになり、重機で平らにした土地のガラスや小石を拾い、また重機で均し危険物を拾うことを何度も繰り返し、仮設でしたが立派なグラウンドが完成しました。後日ささやかにグラウンドの落成式が行われ、陸前高田に唯一のグラウンドが出来たことも忘れられないことです。こうしたことも今日はこの場所、次は別の場所と一回限りのボランティアの繰り返しでは気づくことのできなかったことです。

2013 年夏、事務局は様々な意見を踏まえ、福島県浜通りでのボランティア活動をスタートしました。場所は南相馬市小高区、まだ避難指示が解除される前の居住が制限されている時期のことでした。原発事故から 2 年以上経過しているとはいえ、まだ事故前に比べて高い空間放射線量を示していた南相馬で活動することに、事務局全員が賛成した訳ではありませんでした。私

たちは、南相馬市や社会福祉協議会を訪ねて話を聞き、試しに一般のボランティアさん一緒に活動するなどして、現場の状況を確認し、国の基準に沿って活動を開始することになりました。

【南相馬市小高区 2013 年夏】



当時の南相馬市は宮城県や岩手県と違い、震災後の惨状が手つかずのまま放置されていました。私たちはここで、再び震災直後のような復旧作業からボランティア活動を始めることになりました。

国道 6 号線沿いには各所に検問が設置され物々しい雰囲気の中で、企業や団体のボランティアの姿は見え、個人の手慣れたボランティアが数名参加している程度でした。最初は津波で寸断された排水溝の泥を出し、水はけを改善する作業を割り当てられました。

【小高区で津波跡の側溝の泥だし作業】



2013 年の下期は、泥だし作業が中心でしたが、翌年から個人宅の荷物の運び出しの作業が増えてきました。震災から時間の経過とともに、小高区での再出発をあきらめ、別の町での生活を選択する方が多く、家の整理をする作業を依頼されました。

【南相馬市小高区：家財の運び出し作業】



家財を運ぶ間もなく、取る物も取らずに避難させられた人々は、2014 年には新しい拠点での生活を始めていて、それまで住んでいた家を解体するため家財道具一切を運び出し、全て廃棄するためにボランティアの力を借りるケースが目立ちました。暮らしに根差す産業を生業としてきた私たちにとっても、この現実を前に深く考えさせられることがありました。家具家電、寝具、食器やおもちゃ、趣味の物がどんどん外へ運び出され捨てられている様子を見て、原発事故の無残さを実感しました。

またこうした危険や重労働を伴うボランティア作業の中で、イオンのボランティアには女性の方が多く大活躍されていましたが、特に家の家財の運び出しでは、家主の女性の方の安心感も高く、衣類や台所の片づけなどでは事務局としてもとても助かりました。

【家の片付けをするボランティア参加者】



2015 年度以降は、庭の草取りや竹藪の処理など家の周りの作業の依頼が増えてきました。4 年以上放置した庭は雑草や庭木の枝葉が生い茂り鬱蒼としていました。さらに家の周りの竹林があばれ、家の中に侵入した地下茎から畳を破り竹が生えている住宅もありました。

2016 年の春、イオンタウンの新入社員研修の一環として、南相馬でボランティア活動を体験するカリキュラムが行われました。一般参加のボランティアさんと一緒にあるお宅の庭の清掃に出かけましたが、そのお宅から依頼された作業も家の周辺の清掃でした。家主さんから庭の除草と庭木の剪定をお願いされましたが、庭木は全て根元から切り倒して欲しいと頼まれました。庭には様々な植木が育ち、その中にはまさに今満開の桜の木がありました。家主さんに理由を伺うと「別の町に引っ越すので未練を残したくない」ということでした。それにしても満開の桜を切り倒すことになるとは思わず何度か確認しましたが家主さんの思いは変わりませんでした。一般のボランティアさんが慣れた手つきで木にロープをかけ、私たちはそのロープを引いて広い場所に桜を倒しました。作業を終え、移動のバスの中で参加した新入社員に感想を聞いたところ、

一人から「満開の桜を切り倒すなど誰もしない異常な行為です。でもこの場所ではそうしたことが起きているし、今日現実を目の当たりにしました。翻って考えると私は日常の平和な暮らしがいかに大切なのかよくわかりました。」と話してくれました。

【満開の桜とイオンタウンの新入社員】



同じく 2016 年 7 月には小高区に出されていた避難指示が解除され住民の帰還が始まりました。この頃には帰還するために家を片づけたりするボランティアが増えるのではと予想しましたが、残念ながらそうしたニーズは少なかったようです。

避難指示の解除に合わせ常磐線が浪江駅まで再開し、通行止めだった国道 6 号線も開通し、直接いわき方面へ行き来できるようになりました。ちょうど 2016 年 3 月にイオン広野店がオープンしたこともあり、広野町や周辺市域でのボランティア活動が始める弾みとなりました。また国道 6 号線や常磐自動車道の開通は、全国から東京駅に集合しバスで東北入りしていたボランティア活動の行程を改善し参加者の身体的な負担を軽くしました。

広野町で次活動するに当たっては、広野店オープンに伴って実施した植樹祭でお世話になった、地元の「広野わいわいプロジェクト」さまの活動をお手伝いすることになりました。「広野わいわいプロジェクト」ではいわき市の NPO ザ・ピープルが手掛ける「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」に加わり耕作放棄地となった畑でオーガニックコットン栽培を始めていました。原発事故後、福島県の農産物は風評被害も伴い大打撃を受け、高齢化の影響も加わり離農する農家も多く耕作放棄地が広がっていました。畑も水田もいったん耕作が中断すると再生が困難になります。そこで食べ物ではない綿花を作付けすることで福島の農地と農業を守ろうとする取り組みです。

「広野わいわいプロジェクト」の皆さんと種まきから除草、収穫まで一年を通してのお手伝いが始まりました。小高区の避難指示も解除され社会福祉協議会の運営するボランティアセンターも活動を終えるころから、農業を手伝う、いわゆる「援農ボランティア」が活動の中心になっていきました。

【広野町：オーガニックコットンの収穫】



「援農ボランティア」では、浪江町の NPO 「JIN」さまの行う花卉栽培支援や南相馬市の「天神工房」「カヤノキファーム」さまの

ガーデンハックルベリーの栽培支援、中通りの鏡石町では「稲田農園」でのキュウリや果樹栽培のお手伝いなどを行いました。いずれの農家さまでも原発事故後の福島で農業を続けることへのご苦労や福島の農業の現状について、貴重なお話を聞く機会となりました。

3、未来共創プログラム

グループ各社の活動を更に進めるため、震災発生から5年が経過した2016年度から、岩手、宮城、福島に6つの地域を設定し各社とつなぐ「未来共創プログラウ」をスタートさせました。復興庁が示すフェイズも「復旧から復興・創生のステージ」への移行が発信されており、ハード面の復旧からコミュニティ再生など「心の復興」がテーマになる時期でした。

6 地域の設定については、前述した各社の「推進責任者研修」でお世話になった地域から、岩手県は釜石・大槌地域と遠野市米通り地区、宮城県は気仙沼と丸森町耕野地区、福島県は南相馬市小高区と浪江町で進めることにしました。

「未来共創プログラム」を進めるうえでお手本とした地域が遠野市の米通地区でした。住民20名ほど、世帯数10件ほどの集落ですが、季節ごとに山の神、田の神を祭り集落の自治が継承されている里山に囲まれた集落です。この地域の魅力は方言で「最後まですける」（住民同士が最後まで助け合うこと）です。代々続く集落の時間軸でのつながりは、「自らもやがてこの地の祖先になる」ことを当たり前のこととして受け入れながら、生きる姿を見せていただきました。親しくなるにつれ「生きた証を残したい」という言

葉を何回も伺いました。この集落に全国の学生たち、海外からの若者、そして人事院の研修などで毎年数百名の人が訪れていました。米通は古くからの共同体の姿を残すだけでなく「よそ者との交流」や「新しい挑戦」に積極的な所でもありました。

【米通公民館で地域の皆さまとの交流会】



私たちは米通の皆さまとの話し合いの中で、未来共創プログラムの基礎となる考え方「交流と創造」をテーマとして定め、第一段階として各地域との「交流」からスタートすることとしました。各地で行われる未来共創プログラムにおいて、進め方に行き詰まった時などには、米通に戻り地域共同体のあるべき姿について考えました。米通での活動がどのような学びに繋がったのかは後にまとめたいと思います。

【遠野市米通、どぶろく完成発表会】



宮城県では丸森町耕野地区での活動について報告いたします。丸森町は宮城県の最南端に位置し、県境を福島県に挟まれている形の町です。いわゆる中山間地が町のほとんどを占め、太平洋に面した平野部とは違い大規模な水田などはありません。耕野地区は町の中心から北西に位置し阿武隈川沿いの高低差の大きな中山間地になります。

【宮城県南部、丸森町周辺地図】



東日本大震災では津波被害こそなかったものの、原子力発電所の事故により、その日吹いていた風向きの影響で放射線量が上がり、特産だったキノコやタケノコ、干し柿、野生のイノシシ肉などが大きな打撃を受けてしまいました。津波や原発事故に代表される東日本大震災ですが、事務局として地元仙台にいても、実際に丸森町を訪ね地域の人の話を聞いてみて初めて知ることがありました。

また丸森町は平成15年に改正された地方自治法により、公の施設の管理を民間事業者等に代行させることができる「指定管理者制度」を活用し各地域の住民が団体を設立し、支所機能の大半を担っている先進的な地域であります。耕野地区でお世話になった「荒野まちづくりセンター」も耕野振興会がまちづくりセンターの管理と役場のほぼ全ての行政サービスを行っています。

【耕野地区の住民の皆さまと交流】



耕野地区は秋の干し柿づくりが盛んで、宮城県が行う中山間地域の活性化策として早くから「援農ボランティア」の取り組みが行われていました。仙台地区の学生などを対象に広くボランティアを募集し、バスを仕立てて送迎を行い、農家には干し柿作業最盛期の助っ人として、参加者には農家さんとの交流の機会を得られるという相互に魅力ある実証実験をしていました。

こうした取り組みを伺い、交流を機に従業員の干し柿づくりボランティアへの発展や、イオンスーパーセンターでの干し柿販売、遠くイオン琉球での従業員販売などに広がりました。

さらにマックスバリュ東海では独自のボランティアを実施するほか、耕野小学校の子どもたちを愛知県に招待し干し柿の販売体験をしてもらうなど交流が深まり現在まで続いています。

【耕野小学校を愛知県に招いての干し柿販売体験】



耕野地区との取り組みの中で、最も記憶に残っているのは、栽培されたタケノコの出荷風景でした。ベルトコンベアで最新の放射線測定器に流れたタケノコが「検出されず」「基準値以内」「基準値超え」の3区分に自動的に選別されていきます。その日は基準値を超えるものはありませんでしたが、地区の人の話では、同じ耕野地区でも竹林の違いで放射線の値が違うとのことでした。約8割のタケノコは「検出されず」で出荷されますが、2割の「基準値内」は廃棄されるとも伺いました。原発事故から数年が経過した時点での現状でした。そして放射線の測定は今でも続いています。

福島県での未来共創プログラムについては、浪江町を離れた商工会のメンバーが作ったNPO「新町なみえ」の皆さまと、光洋・山陽マルナカの交流について触れたいと思います。

東日本大震災では多くの人が被災しましたが、とりわけ福島浜通り地区の皆さまに対して、私たちには何が出来るのか、とても難しい課題に直面しました。答えは見つからないままでしたが、被災した人々に「寄り添うように」という姿勢のみ記しました。

この難しい課題に取り組んでいただいたのが光洋・山陽マルナカの皆さまでした。原発事故に伴い最低5年間の「全町避難」を断行した当時の浪江町民、約12,000人は、親戚縁者をたより全国に散り散りになりました。推進責任者研修で町の現状を知った光洋では、早速NPO「新町なみえ」さまが行っていた避難者交流会について、京都府に避難していた浪江町民の皆さまとの交流会のお手伝いを実施しました。

その後も毎年浪江町を訪ね交流を育む中、

光洋では福島の実況を従業員はもとより、お客さまにもお伝えし、募金という形でNPO「新町なみえ」の活動を支援しました。

【光洋から新町なみえ様へ募金贈呈】



募金は「新町なみえ」さまが運営する避難した住民が、病院や役所への移送手段として利用する「ぐるりんこ号」の運営資金の一部となりました。2018年には「新町なみえ」さまからのお誘いを受け、避難指示が解除され7年ぶりに浪江町で開催される「十日市祭」にスタッフ応援として参加することになりました。光洋が依頼された役割は祭りの買い物客の「抽選会」と「アンケート」による避難状況の聞き取りでした。合わせて祭りに来た子どもたちが喜ぶようなゲームを用意して参加しました。

頂いたアンケートの一部を拝見させていただきましたが、旧浪江町民の皆さんが故郷なみえに対して抱いているお気持ちがとても強く感じられました。「十日市祭」への支援活動はその後にも拡大し、2019年には山陽マルナカも合流し、2020年・21年とコロナ感染症の拡大でイベントが中止しているものの継続した交流が続いている。

特筆すべきはこうした交流から2018年の西日本豪雨災害で被災したイオンの店舗へ、浪江の皆さんが、名物の浪江焼きそばを「恩返しの焼きそば」と称して届けていただいたことでした。濁流に家を失い避難所

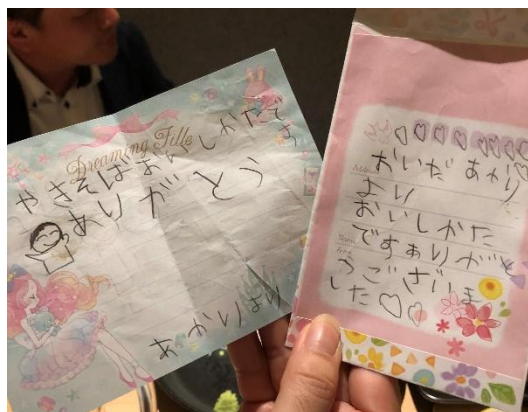
で暮らしている皆さんを思うと、とても他人事とは思えないと、NPO の原田さんが中心となり有志に呼び掛けていただき、早くから店舗での焼きそばの振舞いを申し出ていただきました。18 年夏には被災して間もない広島県三原市の MV 本郷店で、19 年には岡山県の山陽マルナカ真備店の新装開店に合わせて駆けつけ、地域のお客さまに焼き立てのそばを振舞っていただきました。

【広島・岡山で恩返しの焼きそば】



原田さまによると、広島や岡山での新たな人たちとの出会いは、良縁をつなぎ今でも双方で連絡を取り合っているとのこと。す。「寄り添うように支援する」と漠然な方針を定めた福島の方々と関係も、交流を続ける中で、おぼろげながらも「心の通い合うものに」なったと感じています。

【真備町の子どもたちからの御礼の手紙】



4、各社・各単組の活動報告



株式会社光洋
総務部
林 麗子

東日本大震災後、初めて福島県浪江町を訪れたのは 2013 年でした。心をつなぐプロジェクトの現地視察として観光バスに乗り南相馬から浪江町に向かって走っていました。少し行くと開けた荒地が横に見え、そこには数隻の漁船が陸地に取り残されたままです。「えーっ」と思うと同時に突然放射能測定器がビイーと鳴り出し、「ここは見えない危険ゾーンだ」と恐怖を感じました。浪江町民の方から不安に毎日過ごしている事や家族が離れ離れに避難している事をお伺いし、何か行動しなければならないと強く想い、まずは労使合同で「浪江町避難者交流会（京都）」に参加させて頂きました。その時はあまりに重い内容で、じっとお話をお聞きしただけでした。

【2016 年当時、警戒区域の浪江町を視察する】



それから少しずつ避難先の福島県二本松市や各地にお伺いしてお話を聞く機会を持ちました。

その間に一緒に学ぶ機会があり関西地区でも接点がある(株)山陽マルナカ（現マック

スバリュ西日本(株)と共同で募金活動を始めました。2017年には避難指示が一部解除され町内に居住が可能となった浪江町内で、十一月に「復興なみえ町十日市祭」が開かれました。店长・従業員・労働組合の方々と一緒にボランティアとして祭りに参加させて頂きました。お子さま向けゲームブースや祭来場者向けに(延べ3万も来場)アンケートや抽選会を行い、忙しくて目が廻りそうでしたが、笑いが一杯で元気を頂きました。会社が違って労使が違って皆でイオンのロゴ入りビブスを着て一体になったボランティア活動でした。

【浪江十日市祭、光洋従業員が応援に駆けつける】



20年度21年度は、コロナ禍で浪江町を訪れる事は出来ませんでした。浪江町・イオン東北(株)・マックスバリュ西日本(株)・イオン(株)をリモートで繋いで交流会を開催する事ができました。

心をつなぐプロジェクトでは、皆さまにご指導、ご協力頂きました。本当にありがとうございました。(株)光洋はこれからも東北の復興に関心を持ち続け、応援してまいります。



マックスバリュ東海
MYユニオン
中央執行書記次長
高橋 香緒里

初めて丸森町耕野地区を訪れた2015年5月は、原発事故の影響で名産のたけのこも出荷ができず苦しんでいた時でした。たけのこの出荷が再開された時には、収穫から商品になるまでの体験をさせて頂きました。震災以前とは比べ物にならない手間となっている事を知り、安心・安全な商品を届ける努力は、私たちと通じるものがありました。

【タケノコ生産組合の皆さんから説明を受ける】



また、名産のころ柿づくりのお手伝いにも携わり、商品化された商品を耕野地区の方々に当社の店舗で販売頂き、お客さまに丸森町耕野地区の事を知って頂く取り組みもできました。

交流する中で感じた、日頃からの備えの大切さを組合員に伝えるため耕野の竹を使った竹あかり教室と防災について考えるワークショップも労使で開催ができました。

令和元年には台風19号が耕野地区を襲い心が痛みました。しかし前を向いて進んでいく耕野の皆さんとの交流で、いつも私たちが元気をもらって帰ってきます。

プロジェクトは終了しますが、これからも耕野の皆さんと継続して交流を続けます。



イオンファンタジー労働
組合 中央執行副委員長
本田 耕太郎

宮城県丸森町耕野地区・福島県南相馬市小高区にて 2015 年から継続して活動を実施してまいりました。

最初は少人数で行事に参加する形でしたが、2019 年からボランティア活動の社内公募を実施するようになり、毎年 10 月・11 月になると恒例のボランティア活動がある…という形が定着し、急遽募集の作業オフーについても可能な限り対応できる体制になりました。

【耕野地区での竹林整備作業を手伝い】



2017 年から「あかりのファンタジーイルミネーション」に「チーム小高」の一員として、地域の祭事に携わりつつ活気を取り戻す活動を実施してまいりました。イルミネ

ーションはコロナ禍においても灯りを消すことなく、今年 1 月に地域への引継を終えました。

今後は東北との繋がりを継続しつつ、全国各地域においてこれまでの経験を活かし、同様の活動を各地域のメンバーが主体的になって実施できるよう、新たな挑戦に向かいます。

【復興小高秋祭りに縁日屋台を出店】



イオンマーケット労働組合
中央執行委員長
山本 直樹

私たちイオンマーケット労使は、「小高へ帰る人を花いっぱい迎えたい」と町に苗を植え続ける双葉屋旅館の小林さんに出会い、何か力になりたいと、小高を応援する事を始めました。労使で小高を訪れる「東北ふれあいツアー」で地元の方と交流したり、グループ労使と「チーム小高」を結成し「あかりのファンタジーイルミネーション in 小高」に参画したりと、小高に寄り添いながら活動の幅を広げてきました。

【イオンマーケット従業員が小高駅に植えた芝桜】



「震災から10年」、言葉にすれば簡単ですが、長い時間が経ったのだと改めて感じています。この間、訪れるたびに活気を増していく小高を感じてきました。私たちの取り組みが小高にとって少しでも力になっていたら、これほどうれしいことはありません。

今後の活動は「記憶を風化させない」「防災意識を忘れない」という学びの機会に変わっていくと考えますが、築いたつながりを大切に、小高との交流を続けてまいります。

(写真 32：JR 小高駅のイルミネーション)



イオン北海道（株）
環境・社会貢献広報・IR 部
環境・社会貢献
マネージャー 千田 愛子

2011 年 3 月、店舗に勤務していた私は、全国から招集される応援メンバーとして、実際に現地に駆けつけることはできませんでした。この経験から、その後 2013 年に本社で環境・社会貢献担当となってからは、「北海道から現地に行くことが難しい従業員が、北海道に居ながらにしてできる復興支援活動」を課題として、取り組みを進めてきました。

被災の風評・風化を防ぎ防災意識を高める「語り部の会」や、福島県南相馬市役所と連携した地元事業者の商品の従業員販売など、離れていてもできる支援活動を行ってきました。そんな取り組みの積み重ねで、福島県南相馬市は私たちイオン北海道の従業員にとって、「被災地のひとつ」ではなく「実際に訪れたことはなくても特別な場所」になっているのではないかと思います。

【イオン札幌平岡店での南相馬市フェア】



最終年度は「支援から取引へ」を目指し、東北フェアでの南相馬市商品の取り扱いを実現しました。この人と商品の繋がりをこれからも継続・拡大していけるよう、活動が続けてまいります。



イオン九州労働組合
中央執行委員長
伊本 博志

イオン九州では労使で運営するイオン九州社会貢献基金の重点活動として多くの従業員を被災地ボランティアに派遣しました。また、遠野市や釜石市でのまごころ就労支援センターでの活動やまごころサンタ、そして南相馬市での活動などから多くの学びを得ることができました。

【イオン熊本で小高の高校生が南相馬物産販売】



また、その学びは 2016 年熊本地震の際に、遠野まごころネットと連携した熊本県菊池市でのボランティアや、益城町テクノ仮設団地でのまごころサンタ、そして小高産業技術高校の吹奏楽部を招いての熊本工業高校との合同演奏会や、学生が開発している物産販売など、被災地同士の支援の連携にも繋がりました。マックスバリュ九州でも労使で福島ひまわりプロジェクト、統合後の新生イオン九州でも小高とうがらしプロジェクトに参加し苗木を育てるなど、活動を継続しています。

九州は豪雨による災害も多く、南海トラフの懸念もあります。イオン九州労使はこの活動を通しての学びや繋がりを今後も大切にし、未来に繋いでいきます。

【益城町の仮設住宅にて九州まごころサンタ】



イオン
クレジットサービス（株）
総務部長 加藤 真智子

こつな十年を、終えたという感覚があまり無く大切な節目であり、新たな形で紡いでいくことを考えながら走っている状況です。

こつなで学んだことはあまりに多く、言葉にしきれない感謝の気持ちと温かい想い出、大切な絆に溢れています。

現地での活動は大切ですが、足を運べないけれど、想いを寄せている、何か役に立ちたいと思っている従業員が沢山いることを再認識した直近二年でもありました。「おうちで」シリーズ（ひまわり里親、間伐材木工等）は定番メニューとして継続したいですし、リモートから交流が始まったパートナーとの現地での活動にも期待が高まります。

大変な状況は続いていますが、こつな十年の最後の二年に課せられた制約の中、様々な活動方法や離れていても感じられる連帯感や絆が生まれたことも実感します。是非、感謝とつながりを次なる活動へと結実

し続けていきたいと思います。

【ふたば未来学園高校で金融の出前授業】



(株) メガ・スポーツ
人事相馬本部
総務部長 中山 浩

(株)メガスポーツは、この10年で様々な活動に携わらせて頂きました。仙台での野球教室から釜石でのバドミントン教室、キャンプやスノートレッキングイベントなど当社の主業であるスポーツを通じた活動により地元の方々と関わりを構築してまいりました。

【遠野市でスノートレッキングを実施】



様々な活動から、「地域との共生」を企業市民としてどのような形で従業員に伝えるべきか試行錯誤の中、労使一丸となり実現

させた社会貢献推進セミナー釜石がございました。このセミナーは「見る」「聴く」「体験する」をテーマに従業員一人一人に東日本大震災で甚大な被害を受けた東北の方々が前に進む姿を、海岸清掃や防災学習など様々な活動から得た知識により今後の個人の成長に少しでも貢献出来たと考えます。

(株)メガスポーツはこの東北での活動から学んだことを活かし、全国の従業員が地域で課題発見から解決までを判断し行動の出来る人材育成の基盤作りを進めてまいります。

【大槌町の根浜海岸で海岸清掃活動】



リフォームスタジオ
労働組合
中央執行委員長
在原 信宏

イオン心をつなぐプロジェクトのもと2020年に「イオン 未来共創プログラム」へリフォームスタジオ労使で活動に参加し、現地やイオングループ他社と共の活動を行うなかで多くの学び、気づき、繋がり、絆がありました。

活動を通じて当社事業内容と関連性が高

い「南三陸ミシン工房」の技術を活かし、当社の「マジックミシン」のサービスを通じて、全国の「お客さま」へ喜んでいただけるような繋がりのある取組をしたいと労使で考えた結果、「南三陸ミシン工房」へ「シック布」の製作協力いただき、マジックミシン店舗のお直しメニューとして展開・紹介の取組を行いました。

今回の経験を大切にして活動を続けて参ります。

【南三陸ミシン工房での交流会】



【南三陸ミシン工房に補強布作成を委託】



イオン琉球株式会社
人事教育部
上原 美佐緒

イオン琉球では、労使一体で取り組む「イオン心をつなぐプロジェクト」に賛同し、当初から様々な形で参加してまいりました。

2019年からは、福島県鏡石町のお米特別栽培米「牧場のしずく」の拡販に取り組みました。これは、風評被害で苦戦している産地を支援するために、行政、農業関係団体と協力して福島県産の美味しいお米を、沖縄県内のイオン、マックスバリュ、ビッグ全店で販売してきました。この取組みは一時的な物産フェアではなく、全店で長期間拡販し、定番として継続販売を目標としてまいりました。

おかげさまで、美味しいお米として人気の商品になっております。プロジェクト終了後も 継続して定番として拡販いたします。この取組の中で、産地の生産者の皆さま、鏡石町の職員の皆さま、農業関係者の皆さまと交流し、共に力を合わせた事業の経験は、当社にとって大変貴重な経験となりました。

【イオン琉球、社内で丸森町耕野の物産を購入】



V. プロジェクトの評価と検証

1、数値目標の達成と進捗状況

冒頭のグラフで表したように、数値目標である「植樹本数 30 万本」と「従業員の参加人数 30 万人」は、2019 年春に活動期限を待たず達成いたしました。

植樹活動では、国の主導する海岸林植樹の方針や環境整備に時間がかかり、本格的に植樹活動が軌道に乗ったのは 2014 年の名取市海岸林植樹からになりました。均等割でも年 3 万本の植樹が必要となり、1 年目・2 年目は植樹地と協力団体を探し出し、調整するのに追われ本数は伸びませんでした。2015 年からは沼市や南相馬市で、故宮協昭先生が指導する「森の防潮堤」づくりが始まり、自治体と協働し苗木の提供と大規模な植樹祭に従業員ボランティアを派遣することで植樹本数を増やしました。またイオン 1 %クラブ、イオン環境財団の協力もあり「鎮守の森植樹」や「海岸林植樹」がほぼ予定通りに進展しました。

イオンピープルの参加関与は、推進責任者研修や現地でのボランティア参加者が増えるにつれ徐々に活発になりました。2016 年からスタートしました、各社と 8 地域を結ぶ「未来共創プログラム」が軌道に乗ると、各社では、活動の主体としての意識も高まり、参加者数も順調に増えていきました。参加者数は 2018 年下期に 30 万人を超え、累計人数は 41 万人にまで拡大しました。

従業員参加に対する課題は、①グループ全体に周知が進み波及するまでに 2 年以上のタイムラグがあったことと、②プロジェクト活動への関与や関心がグループ各社、各単組、イオンピープル個々人にも偏りが

見られたことでした。

2、中長期計画の推進と乖離

中長期の計画については、植樹活動・従業員の参画ともにスロースタートとなったことを前述しました。同様にプロジェクト全体の進捗も「初期的構築期」として計画した 3 年では足りず、実態は 2014 年いっぱいが第一期に相当する活動であったと思います。

合わせて第二期「自立拡大期」は、「未来共創プログラム」のスタートと連動して、2015 年から 2018 年の 3 年間であったと想定します。しかし活動の主体が事務局から各社、各単組へ移り、本格的に拡大していく状態になった活動は、あまり多くは見られませんでした。この間も「熊本地震」や「西日本豪雨」などの自然災害は後を絶たず、心をつなぐプロジェクトの波及効果も十分に発揮されたとは言えない状況でした。

「整理充実期」と定めた第三期は、未来共創プログラムを通して各地域と各社の交流が深まり、幾つか「交流から創造」が生まれてきました。目に見える形として下のような取り組みが創造され実現しました。

- ① 岩手県大槌町でのクレソン栽培と地域ブランドづくりへのチャレンジ
- ② 岩手県遠野市米通でのどぶろく米の栽培支援と商品化と販売支援
- ③ 福島県南相馬市小高産業技術高校との郷土食をテーマにした弁当の商品開発
- ④ 福島県南相馬市小高区での「灯りのイルミネーション」復活への支援
- ⑤ イオン琉球の福島県鏡石町との福島産米の販売支援

プロジェクト活動の最終段階では、予期せぬ新型コロナウイルスの感染症拡大により、活動の成果を見届けぬままに現在に至

る取り組みもごさいます。数値目標は前倒しで達成したものの、現地へのボランティア活動は実施できず、オンラインの場でお世話になった各地の皆さまと交流会を実施し、ボランティア活動を締めくくらすを得ませんでした。

プロジェクト全体の長中期の見通しと、実践の整合性については、スタートの出遅れと終盤アクシデントに見舞われたものの、総じて見通しとの乖離は小さく、概ね計画通りに進めることができたと考えます。

3、コンセプト・活動目標との整合性

<基本コンセプト>

イオンの基本理念である「人間」「平和」「地域」に基づき、全国のイオンピープルが、イオンの経営活動で得た多様な資源を活かして、創造性を発揮し、創発的な取組地して、東日本大震災の復興に貢献する。

イオンピープルにとって、この体験はイオンの理念を体感する機会であるとともに、人間としての成長の気化器となる。翻ってそれは、商人（ビジネスマン）としての成長でもある。

再びコンセプトに立ち返って検証したいと思います。まずプロジェクト全体が「人間」「平和」「地域」に根ざしたものであったか、数値で表すのは難しいものの、その本質的な側面に近づけたものと認識しています。特に福島で行ったボランティア活動においては「平和」な日常の大切さを多くの場面で体験し共有することで、穏やかだった故郷「地域」を取り戻そうとして贖う人々の姿を通して「人間」の尊さと、人と人のつながりが大きな力になり得ることを確認することができました。イオンの経営活動で得た

多様な資源を活かし創発的、創発的に～の部分については、東日本大震災後も相次いだ自然災害への対応では歯がゆい部分も感じたものの、新型コロナウイルスへの対応などを見ると、各社が創発的、創発的に課題に取り組む姿勢が伝わり、良い方向へ進んでいるものと実感しています。

イオンピープルの「人間としての成長」「ビジネスマンとしての成長」に関しても、イオンピープルが心をつなぐプロジェクトへの参加関与を機に、東日本大震災や原発事故を他人事とせず、自然災害やエネルギーの問題について認識が深まったのであれば一応の成果があったと考えています。願わくは「自然と人間」の関係を再考したり、近代に作り出された「科学技術」や「社会システム」と人間の関係について問い直すきっかけになれば、自ずと人間としての成長につながるものと思います。

これも活動の中で気づいたことですが、プロジェクトで掲げた「成長」とはゴールを目指すようなものではなく、「より良い個人による、よりよい社会の醸成」を目指す意思のようなものであり、自己実現のスキームとは種類の異なるタイプのものだと理解しました。こうした活動を進める上で「より良い個人と、より良い社会」を目指そうという意志は、プロジェクト終了後も是非引き継いでいただきたいテーマだと考えています。

一昨年からの新型コロナウイルス感染症への対応についても震災対応と同じように、イオンピープル一人一人が困難を乗り越えていく過程で、家族やお客さまと地域社会の関りを意識し皆が助け合い、其々が成長していくものだと考えています。

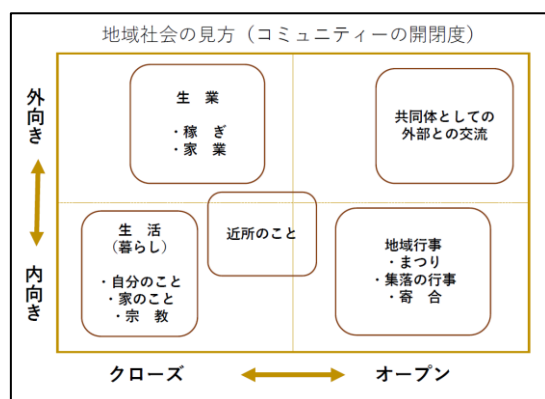
VI. 活動を通して学んだこと

1、地域社会と社会課題

10年間の東北各地での活動を通して、基本理念に掲げる「人間」「平和」「地域」については十分に体感できたと申し上げましたが、「地域」について、もう少し記述したいと思います。

これまでの8地域との付き合いの中で色々な地域社会の特性が見えてきました。震災以前からお付き合いしている島根県沖ノ島の海士町で活躍する皆さまの著「僕たちは島で未来を見ることにした」の言葉をお借りすれば「私たちの毎日は、①暮らしと②稼ぎと③仕事でできている」といいます。①暮らしとは、睡眠時間と自分や家族のために使う時間、②稼ぎとは、生業であり貨幣を得るための活動、③仕事とは、地域社会の諸々の活動であり、祭りや草刈、地域のイベントなどだと定義しました。個人的にもこの表現がとてもしっくりときていて、稼ぎと仕事を区分した点と、地域活動を仕事という言葉で定義したことに惹かれ、よく使わせていただいています。そうした前提の上で地域社会の特性について話を進めたいと思います。

【考察：地域社会の見方】



地域社会がもつ特性のうち、「地域の社交性」を指標として挙げる研究者がいますが、遠野市米通地区を例に考えてみたいと思います。上の図ではタテ軸に、内向きの指向性（プライベート）、外向きの指向性（パブリック）、ヨコ軸に閉じる指向性（クローズ）、開く指向性（オープン）を設定しています。

先ほどの①暮らし、②稼ぎ、③仕事と照らし合わせてみると、内向きに閉じている部分が家庭のこと（プライベート）となります。「稼ぎ」は職種により異なりますが、限られた空間での「職場」というケースが多く外向きに閉じている範囲での活動としました。「仕事」としての近所づきあいや地域活動は内向きに開いている活動とし、さらにそのコミュニティが外部の団体や個人との交流を持てば、外向きに開いている状態と見るができます。

人口20人余の米通地区では、自治会長も農業の傍ら建設会社に勤務し、米通地区での活動ではリーダーとして活躍し集落の祭りや年中行事を取り仕切り、生活環境の補修や整備も自分たちで行っています。こうした中で年間500人にも及ぶ「よそ者」を受け入れ、共に地域活動を体験させ、「山の神や田の神」に招き拝ませてください。このように「暮らし」と「稼ぎ」と「仕事」がはっきりと見て取れる地域が日本にどれだけ残っているのでしょうか。米通の年配の方々も「稼ぎ」からは離れても「仕事」が残っているところに「生きがい」も付随しているということが一番の学びでした。比べて都市部のコミュニティはほとんどが「内向きに閉じていて」プライベート重視が徹底されています。これについて興味深い話を南三陸町でも伺いました。入谷の集落では、

毎年行われる「八幡神社」の祭りで山車が通る道の草刈りを行うそうですが、山車が意外に大きく道幅がギリギリになるのだそうです。あるとき村の長老に「山車を少し小さくしたら」と提案したら「それはダメだ」と一蹴されたそうです。話をしてくれた人は、その時こう思ったそうです。「昔から伝わることには何か意味があって、わざと非合理にしているのではないだろうか（わざと面倒くさくしているんじゃないか）」、「山車が通れる幅の道を定期的に整備することで村人に理があるとか」、「そもそも村人が話し合うこと、そのものを残したかったんじゃないのか」など色々考えたそうです。伝統芸能や習わしも祭りと同じように、本来の目的とは別に、共同体を維持させようとする目的が込められているということも、これからのコミュニティ形成において大切な要素であるように思います。

プロジェクト活動で学んだことをまとめると、実際の地域社会に一定期間継続して関係させていただいたことにより、それぞれの地域の特性や歴史に触れ、人格のようなコミュニティが形成された過程について知り得たことでした。更にかつては力の弱かった住民が、助け合い成り立っていた共同体も、個人の自立と共に関係性が絶たれて今につながっているということでした。10年前には東日本大震災で、今回は未知のウィルスに脅かされ人間一人の無力さを再確認した私たちは「助け合い共生すること」のみが生き残る術であり、皆で「人に優しい社会」を早く実現することが何より大切だと思うのです。

2、自然災害と環境保全

地震災害は東日本大震災以降も「熊本地

震」「胆振東部地震」が発生しています。日本列島の地理的特性上、地震災害が多発することは逃れようのないことです。だから大地震は今後も必ず起こる前提での準備が必要なのです。準備には2つあると考えます。一つは「知ること」であり、もう一つは「行動する」ことです。東日本大震災で何が起り、何が必要だったかを「知る」ことが大切です。知ったことを基に是非「行動」に移していただきたいのです。自分の逃げべき「避難場所」と「避難所」に実際に行ってみてください。家や職場を点検し足りないものを想像し、実際に揃えたり、補強したりしてください。「いつ」「どこで」起きるかわからない地震災害に備えるには、日常から災害への創造力を鍛えておくことが大切なのです。東日本大震災で実感したことは「イオンはまちのライフライン」だということです。私たちがまちの住民の皆さまの命を支えているという実感でした。私たちイオンピープルもまた被災者でありながら、支える側の立場であったという事実です。私たち一人一人は、次に来る大災害に備えて、自分と大切な人の命を守り、いち早くライフラインであるお店を再開させ「地域の日常を取り戻す」ことが一番の使命であり、そのために防災への意識を高め、備えることが大切だと身をもって学びました。

地震災害は時と場所を選びませんが、一方で気象災害は予め災害の兆候を知り直前まで備えることができます。しかしこの10年、西日本豪雨災害をはじめとして、気象災害は頻度を増し規模を拡大させています。私たちはこの活動を通して、自然との向き合い方についても多くを学びました。三陸沿岸で漁や養殖を営む方々から、海の環境

が変わってきたこと、果樹農家の方からは異常気象による開花時期の早まりと遅霜による影響、山林では松や檜の立ち枯れなど多くの自然に関わる課題を目の当たりにしました。

復興の現場では、人の手による新たな環境への負荷が加えられました。津波に襲われた海岸を海と遮断する大規模な防潮堤や、河口をコンクリートで覆う河川工事の影響も懸念されます。また山間部でも農地や山を覆う太陽光発電のパネルが今後の自然環境にどんな影響を与えるのかとても心配です。東日本大震災からの復興は、人と人とのつながりと、人と自然の共存から考え直す必要性を強く感じています。

3、これからの地域共同体を支えるもの

私たちは心をつなぐプロジェクトの活動を通して、被災地が復旧し、復興へ向かう過程を多くの人と共にし、地域の在り方と地域課題、人間と自然の関係について学んできました。振り返るとそこには、当初掲げた支援の目的があり、「こんな地域共同体を再興させたい」という強い願いがはっきりと見えてきました。

「人と人がつながりを持ち、人と自然、自然と産業が共存する、持続可能な社会(地域共同体)の復興をサポートする」

改めてこの言葉を地球に暮らす全ての人へのテーマとして受け止めていただきたいと思います。人と人がつながりを持ち、互いを尊重し助け合い、安心して暮らせる共同体を

つくること。その共同体は、人だけが中心ではなく、自然と人々の営みが調和した本物の持続可能な共同体です。そして人と自然と産業が調和した自立的な共同体同士が開かれた関係にある状態が実現したとき、人々は金や物といった近代的な価値から脱し、新しい価値を手に入れることができるのだと考えています。

<むすび>

東日本大震災をきっかけに「東北で学んだ経験と知恵を新しい日本のふるさとづくりに活かしたい」これが心をつなぐプロジェクトの成果であり、10年間支援して頂いた皆さまへの恩返しだと考えています。

震災からちょうど10年を迎えようとしていた昨年2月末、ZOOMを使用して被災した岩手県・宮城県・福島県の各県の高校に依頼し、未来を担う高校生と震災を通して学んだことをテーマに、シンポジウムを開催しました。生徒さんたちは小学校入学前に震災を体験し、地域の復興を視ながら成長してきました。そんな生徒さんたちの発表は自分だけでなく他人を思いやる言葉ばかりでした。ある時は大人たちに励まされ、ある時は自分より若い子どもたちを気遣いながら「人は人とのかかわりの中で共存するものだ」という答えを導き出していました。

そしてシンポジウムの最後に彼らが今の思いをまとめた言葉を、大きな半紙にしたためました。

「思考を止めない」

偶然にもその言葉は、当日ファシリテーターを務めた遠野まごころネットの多田一彦さまから幾度となく聞いた言葉でした。

「一番悪いのは思考停止の状態、自分の頭で考えることが大切なんです」と。

2021 年 2 月 27 日（土）

【東北から始まる 日本のふるさとづくりシンポジウム】



震災から復興への取り組みは、10 年の節目を迎えました。

東北で培われた地域の絆と、ふるさとを育むちから。

このちからを日本の未来に広げていくことが私たちの使命だと考えます。

これからの日本が直面する様々な課題に、東北が先行して取り組んできたこと。

この資産を全国に活かしていきたいのです。

先の見通せない、不確実なまこそ、新しい地域づくりを始めるタイミングです。

誰もが自分のふるさとだと思える、そんな心の拠り所を日本のあちこちに。

東北のシンポジウムから、日本のふるさとづくりが始まります。

Ⅶ、イオン心をつなぐプロジェクト活動年表 【2011年～2022年】

2011 年	主な出来事	2012 年	主な出来事
3 月 11 日	東日本大震災発生	11 月	プロジェクト推進責任者研修 行先：南三陸～気仙沼～陸前高田 第 1 回：参加者（26 名） 第 2 回：参加者（44 名）
3 月 12 日	東京電力福島第一原子力発電所事故		
4 月～5 月	事業継続 店頭販売 移動販売 従業員対応 避難 安否確認 雇用の継続		
7 月～8 月	津波被災の 営業再開 多賀城店 気仙沼店 ボランティア イオン株 石巻市 陸前高田市 組合 従業員宅 七ヶ浜町	2013 年	
10 月～ 2 月	オールイオ ンでの支援 体制準備	3 月 9 日	スーパーセンター石巻東店 （イオンの森再生植樹）
		3 月 18 日	イオンタワー東北復興マルシェ （3 月 18 日・19 日） タワー1 階で被災 3 県の物産販売
		6 月 9 日	第 1 回岩沼市千年希望の丘植樹 みどりの防潮堤づくりスタート
		9 月 22 日	第 1 回、気仙沼大島亀山植樹
		9 月 30 日	ドキュメンタリー映画うたごころ 上映会：気仙沼市民ホール
		10 月 6 日	第 1 回南相馬市鎮魂復興市民植樹
		10 月 7 日	第 2 回気仙沼、海べの森の植樹
		秋	被災地に植える苗木をみんなで育 てる「苗木の里親キャンペーン」ス タート（大阪ドームシティ・つく ば・幕張新都心など）
2012 年		2014 年	
3 月 9 日	「復興への願いをカタチに」 「心をつなぐプロジェクト」発足	3 月 9 日	イオン多賀城店 （イオンの森再生植樹）
3 月 11 日	イオンタウン塩釜から植樹スタート	3 月 14 日	イオンタウン釜石グランドオープン
4 月	第 1 回、「ボランティア派遣」 （岩手県陸前高田市	3 月 21 日	イオンタウン釜石開店記念 三陸鉄道全線開通記念 「三陸まつり」開催 （3 月 21 日～23 日）
9 月 30 日	ドキュメンタリー映画「うたごころ」 イオンタワーから全国 16 カ所 上映会スタート	5 月 22 日	第 1 回、釜石ぶどう植樹 ボランティアツアーで 550 本植樹
10 月 7 日	気仙沼市「海べの森の植樹祭」実施		
11 月 17 日	イオン環境財団、石巻植樹		

2014 年	主な出来事	2016 年	主な出来事
5 月 24 日	ドキュメンタリー映画うたごころ 上映会：南三陸ベイサイドアリーナ	3 月	【東北支援スローガンの更新】 にぎわい東北、 ～つなげようふるさとのチカラ～ 「未来共創プログラム」スタート
5 月 31 日	第 2 回「千年希望の丘」植樹	3 月 5 日	イオン広野店オープン
6 月 7 日	宮城県名取市台林国有林植樹 「みどりのきずな再生植樹」	3 月 5 日	広野防災緑地植樹
7 月 19 日	イオンスーパーセンター（株） 陸前高田店グラウンドオープン	4 月 14 日	「熊本地震」前震発生
10 月 12 日	第 4 回、海への森の植樹祭 （苗木の里親で育てた苗木を植樹）	4 月 16 日	「熊本地震」本震発生
		6 月 4 日	宮城県東松島市 「みどりのきずな再生植樹」
2015 年	主な出来事	8 月 30 日	平成 28 年、台風 10 号豪雨災害 観測史上初、台風が岩手県に上陸 岩泉町周辺で大規模な豪雨災害
3 月	イオン中国ドキュメンタリー映画 「うたごころ」社内上映会 （北京開錠・広州会場）	10 月 1 日	イオン環境財団主催 第 1 回、宮城県亶理植樹 （3 年計画の 1 回目）
3 月 29 日	南相馬市鎮魂復興市民植樹祭		
4 月 11 日	いわき市久ノ浜防災緑地植樹	2017 年年	
4 月 19 日	第 2 回、釜石ぶどう植樹	4 月	「釜石ワイン」発表会 イオンタウン釜石イオンホール
春	南相馬市小高区のボランティア活 動、期間・移住に向けた、家の片付 けの依頼ピークになる。	2 月・4 月	メガ・スポーツが遠野市内でアウ トドアイイベント開催 ・スノートレッキング ・キャンプイベント
9 月 9 日	平成 27 年度、関東・東北豪雨発生 （9 月 9 日～11 日）	6 月 18 日	陸前高田「高田松原再生植樹」
10 月 12 日	広野町二ツ沼公園シャウナゲ植樹 （イオン広野店開店記念植樹）	7 月 12 日	南相馬市小高区「避難指示解除」 （JR 原ノ町駅～小高駅 再開） （イオンマーケット従業員。 小高駅前に芝桜を植える）
10 月 31 日	南相馬市、八坂神社鎮守の森植樹	9 月 23 日	石巻市南浜津波復興祈念公園植樹
11 月 28 日	マックスバリュ東北主催 福島県新地町「ふれあい野球教室」 各社の活動を具現化するため、 推進先任者研修を「未来共創プロ グラム」に改める。	10 月 7 日	第 2 回、イオン環境財団 宮城県亶理町植樹
冬		11 月 25 日	小高灯りのファンタジーイルミネ ーション点灯式 （チーム小高、電飾寄贈と装飾）
2016 年			
3 月 11 日	震災から 5 年 国の復興計画「復旧・復興」から 「復興・創生」へ		

2017 年	主な出来事	2019 年	主な出来事
11 月 25 日	「浪江十日市まつり」 7 年ぶりに地元浪江で開催 光洋・山陽マルナカスタッフ応援	3 月 8 日	仙台市荒浜植樹 累計植樹本数「30 万本達成」
12 月 23 日	小高産業技術高校プラスバンド部 「熊本地震被災地訪問」 益城町で熊本の高校生と演奏会 イオンモール熊本で南相馬の物産 販売を体験	3 月 16 日	三陸鉄道全線開通記念 岩手県大槌町「大槌駅前植樹」
		5 月 1 日	「改元」平成から令和へ
		5 月 17 日	岩沼市「千年希望の丘」植樹 (イオンモール同友店会)
		6 月 1 日	南相馬市鎮魂復興市民植樹祭
		6 月 27 日	岩手県山田町 「復興まちびらき」植樹
		7 月 14 日	イオン浪江店オープン
		8 月 9 日	遠野市米通地区 「米通どぶろく」完成発表会
		9 月 23 日	イオン環境財団 石巻市南浜津波復興祈念公園植樹
		10 月 12 日	令和元年東日本台風・被害発生 福島県浜通り、丸森長で被害大
		10 月 26 日	イオンスタイル板橋にて「東北フ ェアー」小高産業技術高校との、コ ラボ弁当販売
		11 月 9 日	イオン琉球×福島県鏡石町 「北谷町商業祭」で鏡石町の米や 産品を販売
		11 月 23 日	灯りのファンタジーイルミネーシ ョン小高 2019、点灯式
		11 月 23 日	浪江十日市祭 光洋・山陽マルナカスタッフ応援
		1 月 15 日	国内で最初の新型コロナウイルス 感染者が確認される。
		2 月 17 日	ブランシェス、広野小学校で バナナペーパーについての授業 フィリピンの子どもたちと、 ZOOM で交流する。
2018 年			
3 月 24 日	気仙沼大島、亀山植樹		
6 月 18 日	第 69 回、全国植樹祭 「ふくしま 2018」南相馬市で開催		
7 月上旬	6 月 28 日～7 月 8 日 平成 30 年 7 月西日本豪雨災害発生		
7 月 22 日	イオンモールいわき小名浜開店 (津波対策構造で周辺地域の避難 施設を兼ねてオープン)		
8 月 4 日	西日本豪雨被災の MV 本郷店にて 浪江町の有志による炊き出し (恩返しのみえ焼きそば) 実施		
8 月 25 日	MV 須賀川店にて、岩瀬農業高校 生徒さんとキズ桃のフードロス対 策、「まるごとピーチアイス」販売		
9 月 6 日	北海道胆振東部地震発生 (北海道の広域で停電)		
9 月 23 日	石巻市南浜津波復興祈念公園植樹		
10 月 4 日	イオンモール盛岡、大槌町の「かね さわクレソン」試食販売		
11 月 4 日	第 1 回ふくしま植樹祭 2018 参加		
11 月 17 日	灯りのファンタジーイルミネーシ ョン小高 2018、点灯式		
11 月 24 日	浪江十日市祭 光洋・山陽マルナカスタッフ応援		

2020 年	主な出来事	2021 年	主な出来事
2 月 3 日	クルーズ船で集団感染	10 月 4 日	光洋・山陽マルナカ
3 月 7 日	「東北フェア」岩手県ブース 米通どぶろくイオン与野店で販売		「NPO 新町なみえ」と オンライン交流会を実施
3 月 30 日	2020 東京オリパラ大会延期	10 月 9 日	「五柱神社」鎮守の森植樹 仙台市若林区藤塚地区
4 月 1 日	2020 年度のボランティア派遣中止 の判断し告知する。	10・11 月	オンラインボランティア交流会 宮城県コース：10 月 13 日 福島県コース：10 月 27 日 岩手県コース：11 月 17 日
4 月 17 日	南三陸町入谷地区 「山採り苗木植樹の実証実験」	11 月 6 日	内閣府「ぼうさいこくたい 2021」 いわて釜石会場に出展
7 月	令和 2 年度 7 月豪雨災害発生 7 月 3 日～31 日にかけて発生した 熊本県を中心とする集中豪雨	11 月 12 日	イオン北海道「東北フェア」 南相馬市物産コーナー展開
10 月	コロナ禍の活動として 「心をつなぐお買い物」を計画 各地の商品を従業員向けに販売	11 月 20 日	灯りのファンタジーイルミネーシ ョン小高 2021、点灯式 (イルミネーション贈呈式)
11 月 16 日	イオンモール新利府南館植樹 「山採り苗木を植樹」	11 月 10 日	イオンスーパーセンター (株) EC サイトに心をつなぐお買い物 ページ構築
11 月 14 日	灯りのファンタジーイルミネーシ ョン小高 2020、点灯式	12 月 4 日	広野小学校×遠野和紙工房 バナナペーパー卒業証書紙すき
2 月 13 日	福島沖で地震、M7.3、震度 6 強	12 月 12 日	小高千本桜プロジェクト植樹 イオンプロダクトファイナンス
2021 年		12 月 16 日	いわき市 NPO ザ・ピープル ダイエー労使が古着を寄贈 (今年で 2 年目、7,300 着)
2 月 27 日	「震災から 10 年、東北から始まる 日本のふるさとづくりシンポジウ ム」youtube で配信。	1 月・2 月	イオンリテール「防災学習」 北信越カンパニー：1 月 11 日 中四国カンパニー：2 月 25 日
3 月 25 日	イオン気仙沼店で防災動画を収録 2021 年度の「防災教育」の素材と して使用する	2 月 7 日	南三陸 yes 工房×ネスレ日本 キットカットオクトパス君パック イオン限定で全国発売
3 月～	コロナ禍の活動として計画 新利府店などで「パネル展」実施	2 月 20 日	活動終了、次のステージへ
6 月 18 日	スーパーセンター栗原志波姫店に 心をつなぐプロジェクトのコーナ ーを構築する。		
9 月 27 日	「光洋・山陽マルナカ」 「一般社団法人まちづくり浪江」 とオンライン交流会を実施		